粉瘤より生じた morphea-like BCC の 1 例

野々村秀明 寺師 浩人 辻 依子 大守 誠
増田 節夫 佐藤 誠 田原 真也

神戸大学医学部附属病院形成外科

要旨 症例は64歳、男性。15年前より、前額部に腫瘍を自覚していた。自壊したため、近医を受診したところ、粉瘤と診断された。切開・排膿処置後、創治癒が遷延したため当科を紹介受診した。前額部ほぼ中央に潰瘍を有する径3cmの硬結を認めた。生検を行ったところ、morphea-like BCCと診断された。後日、全身麻酔下に切除術を行った。病変部から5mmのマージンを取り、骨膜上で切除し人工真皮を貼付した。側方および深部の切除断端が陰性であることを病理組織学的に確認し、その2週間後に含皮下血管網植皮術を行った。病理組織学的所見では、破裂した正常表皮嚢腫と考えられる壁から連続性に好塩基性に染まる腫瘍細胞を認めたため、粉瘤から生じたBCCであると診断した。腫瘍は間質の増生を伴い、小さな腫瘍巣を持ちながら、浸潤性に周囲組織に増殖していた。

A case of morphea-like basal cell carcinoma arising from an epidermal cyst

Hideaki NONOMURA, Hiroto TERASHI, Yoriko TSUJI, Makoto OHMORI, Setsuo MASUDA, Makoto SATO, Shinya TAHARA

Department of Plastic and Reconstructive Surgery, Kobe University, Graduate School of Medicine

We report a case of morphea-like basal cell carcinoma arising from an epidermal cyst on the forehead. A 64-year-old man noticed a subcutaneous mass on his forehead 15 years ago. It ruptured spontaneously and then an open drainage treatment was performed after its diagnosis as an epidermal cyst. After one month, he visited our hospital because the wound was slow in healing. It was diagnosed histologically as a morphea-like basal cell carcinoma originating from an epidermal cyst. The cyst wall was partially replaced by the malignant tumor. According to the literature, basal cell carcinoma is apparently less common in association with an epidermal cyst than is squamous cell carcinoma. And as far as we know, the morphea-like type BCC has not been reported to date. [*Skin Cancer (Japan)* 2005; 20: 39-42]

Key words : Epidermal cyst, Morphea-like BCC

はじめに

粉瘤の悪性化の多くは、有棘細胞癌（以下

SCC）である。今回我々は、粉瘤より発生した斑状強皮症型基底細胞癌（以下 morphea-like BCC）の症例を経験したので報告する。

症 例

患 者：64歳，男性

初診日：2003年10月16日

既往歴・家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：15年前より，前額部に皮下腫瘤を自覚していたが，放置していた。自分で腫瘤を触っていたところ自壊し，痛みを伴うようになったため，近医外科外来を受診した。「炎症性粉瘤」との診断で，同日切開排膿処置を受けたが，1ヵ月経過しても，創治癒傾向がみられないため，当科を紹介受診した。

初診時現症：前額部正中の点線で示している範囲に，約35×30mmの硬結を触れる。その中央部には約10×5×5mmの潰瘍を認め，周囲には毛細血管の拡張を伴っている（図1）。一部生検をしたところ，病理組織学的所見にて表面表皮層には異型像は認めないものの，線維化が目立つ間質内に腫瘍細胞による小胞巣を多数認め，morphea-like BCCとの診断を得た。

初回治療：腫瘍の硬結部外縁より5mm離して（図2 a）皮切を加え，骨膜上で腫瘍を摘出した（図2 b）。腫瘍摘出後の一時的閉鎖として，人工真皮を縫い付けた。

病理組織学的所見：切除標本では，表皮直下に中央に角化物質を含んだ充実性の腫瘍塊を認める（図3）。拡大像にて，表皮には異常所見なく，真皮層には上皮性成分で裏打ちされている囊腫性病変が確認できる。一部の囊腫壁では連続した正常の重層扁平上皮がみられ，ケラトヒアリン顆粒を有するepidermal keratinizationを認めている。また囊腫の内腔にはうずまき状の角質塊が充満しており，epidermal cystが層状の角質物で構成される通常のepidermal cystの角質像とは異なる（図4）。正常な囊腫壁に連続して，間質の線維化が目立つようになり，囊腫壁は不規則に融合する不整な好塩基性

図1．当科紹介受診時臨床像

図2．術中所見
a. 硬結部より5mmのmarginでマーキング
b. 骨膜上で腫瘍を摘出した

a|b

拡大(図4)

図3. H.E.染色 実寸大像
内腔に角質物質を含んだ囊腫を真皮層に認める

図5. H.E.染色 弱拡大像(×40)
連続した囊胞壁の不規則な変化を認める

の胞巣状構造へと移行している(図5)。胞巣状構造を強拡大すると、線維性間質の顕著な増殖を認め、腫瘍細胞が比較的小型の胞巣を形成して増殖している。胞巣の辺縁の細胞による柵状配列ははっきりしない(図6)。なお、腫瘍組織は筋層や脂肪織に浸潤性に増殖している。

以上の所見より、粉瘤より生じた morphea-like BCC と診断した。

治療および経過：全摘出病理組織診にて、側方および深部の切除段端が陰性であることを確認し、腫瘍摘出術の2週間後に右鎖骨下より、含皮下血管網植皮術を行った。術後9ヵ月再発・転移を認めていない。前額部周囲との色調・質感の違和感も少なく、患者は整容的に満足している(図7)。

図4. H.E.染色 弱拡大像(×40)
図3の枠内を拡大してみると、囊腫は粉瘤の所見を示している。囊腫壁は正常な重層扁平上皮より成る。図の左下では囊胞壁の破壊による異物反応を認める

図6. H.E.染色 強拡大像(×100)
小型の腫瘍細胞による胞巣形成と線維性間質の顕著な増殖を認める

図7. 術後9ヵ月

表1. 粉瘤の悪性化の判断根拠

① 臨床的に粉瘤と思われる腫瘍が長年存在していて、その腫瘍がある時期から急速に増大してきたこと   ② 有棘細胞癌の場合、組織学的に腫瘍の組織構築が角質嚢腫様構造を示し、粉瘤の嚢腫構造を想起させること   ③ 腫瘍巣の一部に悪性化していない嚢腫壁が残存していること。   ④ 悪性化していない嚢腫壁が残存し、かつ組織学的にその壁と連続性に異型細胞の増殖が見られること

(土田哲也：皮膚臨床 24 (11), 1277-1281, 1982 より引用)

考 察

粉瘤は日常的によくみられる良性腫瘍で、時に悪性化をみる。Bauerらは、文献的に報告された悪性化した粉瘤137例を集計したところ、SCCが90%以上を占め、残りがBCCであったと報告している¹⁾。一方、本邦では権田らが47例を集計し、SCCが33例で70.2%, BCCが5例で10.6%であったとしている²⁾。いずれにせよ粉瘤の悪性化は、ほとんどがSCCであり、BCCは稀であった^{1)~6)}。

自験例において、粉瘤の悪性化と判断した根拠は、表1に基づいている⁷⁾。自験例はBCCであったため、表1の①③④の3項目で判断したが、そのすべてに当てはまっている。また、嚢腫内腔にある角質物質の組織学的形態は通常の粉瘤と異なっている。これは、悪性化した嚢腫壁による変化と思われる。

次に、BCCの組織型の記載のあったものの中では、粉瘤発生のBCCは通常のBCCと同様にsolid typeが多い⁴⁾。自験例はmorphea-like typeであったが、著者の渉猟し得た限りでは、これまでに粉瘤からmorphea-like BCCが発生したという報告はなかった。通常のmorphea-like BCCの割合は、BCC全体の約4~5%とさ

れている⁸⁾⁹⁾ので、今後類似症例が集積され、臨床的・病理組織学的な検討がなされることを期待したい。

文 献

- 1) Bauer BS, Lewis VL Jr : Carcinoma Arising in Sebaceous and Epidermoid Cysts. Ann Plast Surg, 5 : 222-224, 1980
- 2) 権田和宏, 谷田宗男, 岡田理, 他 : 表皮嚢腫から発生したと思われる鼻背部の基底細胞癌. 皮膚病診療, 20 : 1053-1056, 1998
- 3) 高橋千恵, 林正彦, 松本正朗 : 表皮嚢腫から発生したと考えられる基底細胞上皮腫. 臨床皮膚, 46 : 310-311, 1992
- 4) 庄野佳孝, 永井隆 : 表皮嚢腫から発生した基底細胞癌の1例. 松山赤十字医誌, 24 : 35-38, 1999
- 5) Ikeda I, Ono T : Basal Cell Carcinoma Originating from an Epidermoid Cyst. J Dermatol, 17 : 643-646, 1990
- 6) Delacretaz J : Keratotic Basal-Cell Carcinoma Arising from an Epidermoid Cyst. J Dermatol Surg Oncol, 3 : 310-311, 1977
- 7) 土田哲也, 大原國章 : 表皮様嚢腫より生じたと考えられる有棘細胞癌の1例—当科過去10年間の80症例の臨床的検討. 皮膚臨床, 24 : 1277-1281, 1982
- 8) 石田晋之介, 藤澤崇行, 梁取明彦, 他 : 基底細胞上皮腫の統計. Skin Cancer, 9 : 131-135, 1994
- 9) 岡田克之, 田村敦志, 石川治, 他 : 大型腫瘍を形成した頭部基底細胞上皮腫の1例. 皮膚臨床, 38 : 257-261, 1996